

川東大仙山第10・11号古墳

1994

財団法人広島県埋蔵文化財調査センター

川東大仙山第10・11号古墳



財団法人広島県埋蔵文化財調査センター

目 次

I.はじめに	1
II.位置と環境	2
III.調査の概要	8
IV.調査の古墳	
(1) 川東大仙山第10号古墳	11
(2) 川東大仙山第11号古墳	18
(3) その他の遺構	22
V.まとめ	25

例 言

1. 本書は、平成5年度に実施した東城カントリークラブ造成事業に係る川東大仙山第10・11号古墳(比婆郡東城町大字川東字大仙山430-2)の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、大阪観光株式会社から依託を受けて財団法人広島県埋蔵文化財調査センターが実施した。
3. 発掘調査は、財団法人広島県埋蔵文化財調査センターの調査研究員平川孝志・木村健二・井林秀樹が行った。
4. 本書の執筆はI・IIを木村が、III~Vを平川が担当し、平川が編集した。
5. 本書に掲載した第1図は、建設省国土地理院発行の1:25,000の地形図(東城)を、第2図は、比婆郡東城町が作成した東城町全図其3(1:10,000)を使用した。
6. 図版の遺物番号は挿図の遺物番号と同一である。

挿図目次

第1図	周辺遺跡分布図(1:25,000)	3
第2図	川東大仙山古墳群位置図(1:10,000)	6
第3図	第9~11号古墳周辺地形図(1:250)	9
第4図	調査区設定図・遺構配置図(1:200)	10
第5図	第10号古墳造構図・土層断面図(1:150)	11
第6図	第10号古墳墳堀貼石実測図(1:30)	12
第7図	第10号古墳埋葬主体部実測図(1:40)	13
第8図	第10号古墳第1主体玉類出土状況(1:20)	13
第9図	第10号古墳第1主体出土玉類実測図(1)(2:3)	14
第10図	第10号古墳第1主体出土玉類実測図(2)(2:3)	15
第11図	第10号古墳第2主体出土鉄器実測図(1:2)	17
第12図	第10号古墳出土須恵器実測図(1:3)	17
第13図	第11号古墳造構図・土層断面図(1:150)	18
第14図	第11号古墳埋葬主体部実測図(1:40)	19
第15図	第11号古墳出土須恵器実測図(1:3)	20
第16図	第11号古墳墳丘盛土出土石器実測図(1:2)	21
第17図	SK1実測図(1:30)	23
第18図	SK1出土玉類実測図(2:3)	24

表目次

第1表	川東大仙山古墳群一覧表	7
第2表	第10号古墳出土玉類計測表	16
第3表	SK1出土玉類計測表	24

図版目次

図版 1

- a. 川東大仙山第10・11号古墳遠景
(北西から)
- b. 川東大仙山第10・11号古墳調査前全景
(北西から)

図版 2

- a. 第10号古墳墳丘全景 (北から)
- b. 同上遺構検出状況 (北から)

図版 3

- a. 第10号古墳第1主体遺物出土状況
(北東から)
- b. 同上, 第1主体 (手前) および
第2主体完掘状況 (北から)

図版 4

- a. 第10号古墳第1主体 (左) および
第2主体完掘状況 (西から)
- b. 同上, 墳裾北西部の貼石検出状況
(北西から)

図版 5

- a. 第11号古墳墳丘全景 (北から)
- b. 同上遺構検出状況 (北から)

図版 6

- a. 第11号古墳主体部上部の須恵器
出土状況 (東から)
- b. 同上主体部直上黄褐色粘土
(北から)

図版 7

- a. 第11号古墳主体部完掘状況
(北西から)
- b. 同上 (西から)

図版 8

- a. SK1検出状況 (南西から)
- b. 同上 (北西から)

図版 9

- a. SK1側石検出状況 (南西から)
- b. 同上 (北西から)

図版 10

- 第10号古墳出土玉類, 鉄器, 須恵器

図版 11

- a. 第11号古墳出土須恵器および
墳丘出土石器
- b. SK1出土玉類

I はじめに

近年においては、国民の労働時間の短縮に伴って余暇の有効利用や健康の増進がとなえられるなかで、レジャー施設の充実も次第にはかられてきている。東城町においても、スポーツ娯楽施設としてゴルフ場（東城カントリークラブ）建設が予定されることとなった。かわひげいだいせんやま川東大仙山第10・11号古墳は、東城町市街地の東方丘陵上に予定されたゴルフ場造成工事に伴い発掘調査を実施したものである。

同事業の施工に先立ち、1990（平成2）年10月、事業者である大阪観光株式会社（以下「大阪観光」という）は、広島県教育委員会（以下「県教委」という）に、事業予定地内の埋蔵文化財の有無及び取り扱いについての協議を行った。これを受けた県教委は造成予定地の現地踏査を行い、ここに古墳5基（川東大仙山第6～9号古墳、久代大仙山古墳）が存在することを確認したが、これに加えて、試掘をする調査地点が1か所であること、また踏査未了区域がある旨を付して、1992年2月、踏査結果を事業者に回答した。その後、県教委は試掘及び踏査未了区域の踏査により新たに古墳3基（川東大仙山第10～12号古墳）を確認し、その旨を同年5月事業者に回答した。これらの結果、造成予定地には合計8基の古墳が存在することになった。

県教委は、これらの古墳の取り扱いについて大阪観光と協議を行ったが、川東大仙山第7・8・12号古墳、久代大仙山古墳を設計変更などで現状保存することとし、現状保存が困難な第6・9・10・11号古墳については発掘調査を行い、記録保存を図ることになった。発掘調査の実施については、これら4基をすべて財團法人広島県埋蔵文化財調査センター（以下「センター」という）で調査することは、スケジュールの関係上困難であったことから、第6・9号古墳の2基については東城町教育委員会（以下「町教委」という）で行い、第10・11号古墳の2基をセンターで担当することになった。こうして同年10月、大阪観光は第10・11号古墳についてセンターに発掘調査を依頼し、センターでは、平成5年度事業として、1993年4月12日から7月16日まで発掘調査を実施した。一方、町教委は、平成4年度事業として第6号古墳の調査を行い、第9号古墳は平成5年度事業としてセンターの調査と並行して実施した。なお、6月19日には町教委との共催で第6・9号古墳の内容と合わせてスライドを中心とした遺跡報告会を開催した。

最後に、発掘調査にあたっては、町教委、大阪観光、村本建設株式会社、ふるさと今昔講座を中心とする地元の方々から多大の御協力を得た。記して感謝の意を表したい。

II 位置と環境

川東大仙山第10・11号古墳は、比婆郡東城町大字川東字大仙山に所在する。本遺跡のある東城町は、広島県の東北端の中国山地に位置し、東は岡山県阿哲郡、北は鳥取県日野郡に接する東西約17.5km、南北約30kmの地域で、広島市・福山市に次ぐ広い面積をもっている。地形は急峻で、北部を道後山・三国山など標高1,000mを越す山々が東西に走り、数多くの渓谷が北から南へと通じている。河川は北部から中部にかけて東城川が、南部を帝釈川が流れ、ともに岡山県の高梁川水系である成羽川へと合流しており、集落はこれらの河川の谷間に広がる狭小な平地や盆地に散在している。この地域はこうした地形から比較的容易に山陰・山陽にぬけることができるため、古くより陰陽を結ぶ交通の要地にあたっている。また南部は、岡山県北西部からつづく石灰岩台地であるため河川の浸食によって深い峡谷がつくられており、「名勝帝釈川の谷」で代表される美しい景観をつくりだしている。

東城町には、現在400か所以上の遺跡が確認されている。これらは主に岩陰遺跡・古墳・製鉄遺跡からなるが、以下、時代ごとに遺跡を概観する。

先土器時代から縄文時代にかけての遺跡としては、⁽¹⁾帝釈峡遺跡群が知られている。この遺跡群発見の端緒となった帝釈馬渡岩陰遺跡は先土器時代から縄文前期におよぶ5つの文化層が堆積しているが、その第4層からは胎土に纖維を含んだ無文平底土器とともに、有茎尖頭器や石器が出土しており、先土器文化から縄文文化への推移を示すものとして注目されている。国指定史跡である帝釈寄倉岩陰遺跡や県史跡である帝釈名越岩陰遺跡は、比較的早い時期に調査された遺跡とともに縄文時代全般にわたる順序だった文化層が確認されており、中国山地の縄文土器編年の標準となっている。その後の広島大学文学部考古学研究室の分布調査により、現在までに42か所の洞窟、岩陰遺跡と2か所の開地遺跡が明らかになっている。

弥生時代の遺跡としては、中国縦貫自動車道建設に伴って1975年に調査された牛川遺跡、戸宇大仙山遺跡などが知られている。そのうち牛川遺跡は、弥生後期前半から中葉にかけての5基の土壙墓群で、中央部の4号土壙からは山陰系の鼓形器台が出土し、5号土壙からは吉備系の特殊器台・特殊壺が破碎された状態で出土している。⁽²⁾このように山陰系・吉備系の特徴を持つ遺物が同一遺跡で出土したことは、陰陽の文化と交流があったことを窺わせている。

次に古墳時代についてみると、東城町の遺跡は、大半は古墳で占められており、その分



第1図 周辺遺跡分布図 (1:25,000)

- | | | |
|------------------|-----------------|---------------|
| 1. 川東大仙山古墳群 | 2. 若松第1号古墳 (消滅) | 3. 下藤地山古墳群 |
| 4. 城山第1号古墳 | 5. 中央山古墳群 (消滅) | 6. 大迫山第1号古墳 |
| 7. 貞末谷第2号古墳 (消滅) | 8. 戸字牛川岩陰遺跡 | 9. 牛川古墳 |
| 10. 牛川遺跡 (消滅) | 11. 向追第1号古墳 | 12. 川東遺跡 (消滅) |
| 13. 太室古墳 | 14. 久代大仙山古墳 | |

布は東城町の市街地付近にあたる川東・川西・戸宇地区、南部の三坂・新免地区、南西部の帝釈未渡地区に比較的集中している。これらの古墳の大部分は、横穴式石室を埋葬主体とする古墳時代後半期のもので、前半期に比定されるものは少ない。

前半期の古墳として比較的内容のわかるものとしては、中央山古墳群、若松第1号古墳、大迫山第1号古墳などがあげられる。中央山古墳群は、東城町の市街地のすぐ東側の丘陵尾根上に位置していたが、運動公園建設工事に伴って1977年に広島大学文学部考古学研究室によって発掘調査された。この古墳群は3基よりなり、調査の結果、石蓋土壙および箱式石棺を埋葬主体とする円墳2基と土壙を埋葬主体とする方墳1基が確認された。そのうち箱式石棺を埋葬主体とする第2号古墳からは、鉄劍・鉄刀・鉄鎌などが出土しており、築造時期は5世紀後半と推定されている。⁽⁴⁾ 若松第1号古墳は川西若松の丘陵南側の緩斜面に位置する。⁽⁵⁾ 埋葬主体は竪穴式石室であったと伝えられるが、すでに破壊されているため性格や内部構造は明らかではない。しかし、出土須恵器から5世紀後半から6世紀前半のものと位置づけられている。大迫山第1号古墳は市街地を眼下にのぞむ東側丘陵尾根上の西端に位置する全長45.5mの前方後円墳である。⁽⁶⁾ 1987年に町史編纂事業の一環として広島大学文学部考古学研究室によって発掘調査がなされている。後円部中央で竪穴式石室が検出されており、内部からは獸首鏡・玉類、棺外からは筒形銅器・鉄鎌・銅鎌・鉄刀・矢筒などが出土している。築造時期は4世紀中葉前後と推定されており、現在のところ東城町内では最古の古墳である。

後半期の古墳をみると、発掘調査が実施されたものとしては、貞末谷第2号古墳、戸宇大仙山第3号古墳、犬塚第1号古墳などがある。中国縦貫自動車道建設に伴って調査された貞末谷第2号古墳・戸宇大仙山第3号古墳は、ともに横穴式石室を埋葬主体とするもので6世紀後半から7世紀初頭にかけての築造とされている。⁽⁷⁾ 犬塚古墳群は、帝釈川の谷の東側の北から南に延びる丘陵尾根上に位置し、5基の円墳からなるが、そのうち町道幅員拡張工事に伴い第1号古墳から第4号古墳が1979年に広島大学文学部考古学研究室によって発掘調査された。⁽⁸⁾ そのうち第1号古墳は、直径11mの円墳で、片袖式横穴式石室を埋葬主体にもつが、石室内から多数の玉類や耳環、鉄器、須恵器などが出土しており、6世紀中ごろから後半にかけて築造されたものと推定される。石室は各壁とも石を持ち送って構築されており、この構造は古式の形態と考えられている。

一方、古墳時代の住居跡としては、中国縦貫自動車道建設に伴って発掘調査された川東遺跡がある。⁽⁹⁾ 川東地区的谷頭に近い南向きの斜面にあり、町域内で初めて検出された古墳時代の竪穴住居跡である。工事中に大部分を破壊されての発見であったが、北辺の長さ3.8m

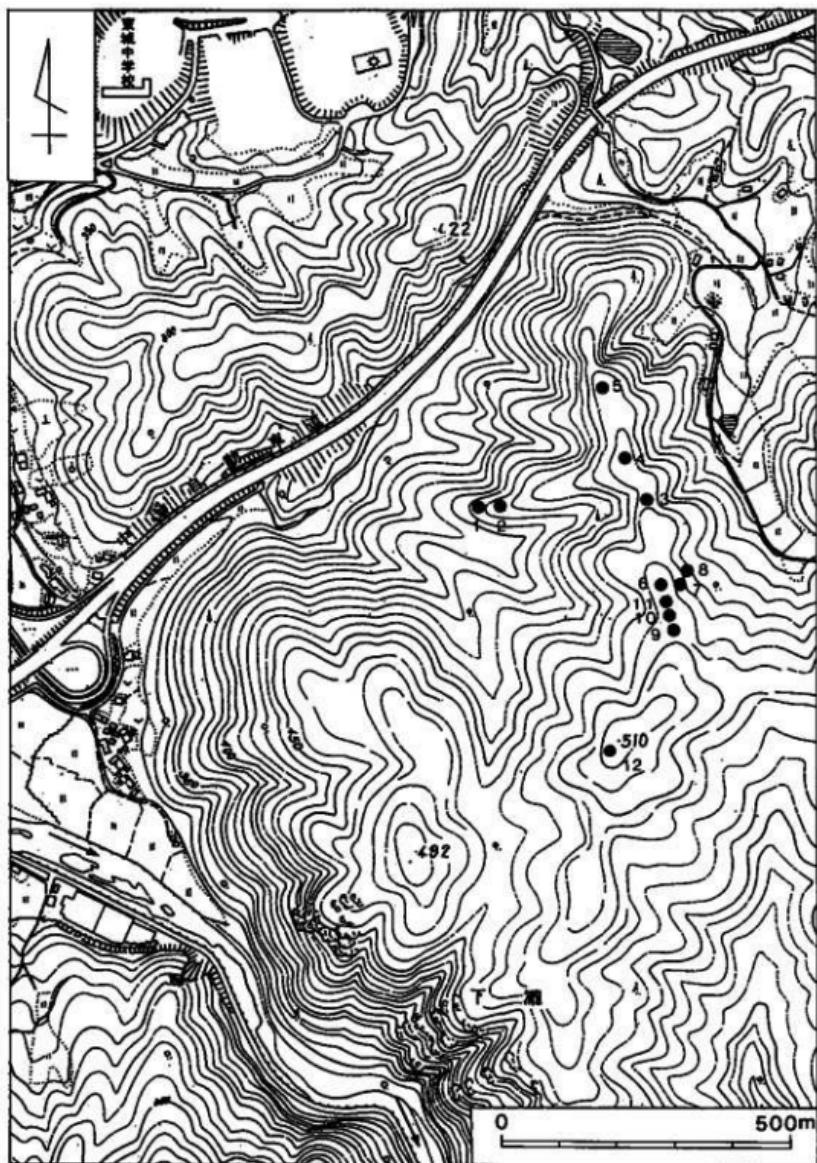
の部分が残る平面形が方形の住居跡で、出土遺物から5世紀前半頃と推定されている。

次に古墳時代以降の遺跡としては、近世から近代にかけての製鉄遺跡であるたたら跡や砂鉄採取の鉄穴溝などがある。現在、町域内のとくに北半の地域を中心として約50か所が確認されているが、これは、この地域が原料となる砂鉄や木炭資源に恵まれており、さらに原料や製品の搬入・搬出に便利な交通の要衝に位置していたためと考えられる。

さて、今回調査をおこなった川東大仙山第10・11号古墳は、12基からなる川東大仙山古墳群の一部である。古墳群は、東城川の東側に連なる山麓中に位置しており、「東城町所在文化財地名表」によると当初は5基の円墳からなるとされていたが、今回のゴルフ場建設に伴う調査で新たに7基の古墳が確認された。この古墳群の概略は第1表のとおりである。

註

- (1) 離波宗朋・藤井峯雄編 「東城町所在文化財地名表」「中央山古墳群の発掘調査」 (広島大学文学部考古学研究室) 1978年
- (2) 帝釈峠跡群発掘調査団 「帝釈峠跡群」 1976年
- (3) 向田裕始 「牛川遺跡」「中国縱貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(2)」 (広島県教育委員会) 1979年
- (4) 広島大学文学部考古学研究室 「中央山古墳群の発掘調査」 1978年
- (5) 離波宗朋 「若松第1号古墳出土の須恵器」「東城町重要文化財調査報告書」第1集 (東城町文化財協会) 1979年
- (6) 東城町教育委員会・広島大学文学部考古学研究室 「大迫山第1号古墳発掘調査概報」 1989年
- (7) 向田裕始 「貞末谷第2号古墳」「中国縱貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(2)」 (広島県教育委員会) 1979年
- 松村昌彦 「戸宇大仙山第3号古墳」 同上
- (8) 大塚古墳群発掘調査団 「大塚古墳群発掘調査報告書」 1980年
- (9) 向田裕始 「川東遺跡」「中国縱貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(2)」 (広島県教育委員会) 1979年
- (10) 註(1)と同じ
- (11) 註(1)と同じ



第2図 川東大仙山古墳群位置図 (1:10,000)

番号	遺跡名	墳形	規模	埋葬主体及び出土遺物	備考
1	第1号古墳	円墳	径4.0m 高1.5m	横穴式石室(全長4.35m, 羨門より幅1.05m, 高1.4m) S20°Wに開口	封土流失, 石室露出
2	第2号古墳	円墳?	不明	横穴式石室(現全長3.3m, 中央部幅1.05m, 高1.55m) S20°Wに開口	封土流失, 石室露出
3	第3号古墳	円墳	径9.4m 高1.5m	横穴式石室(片袖式か 全長2.8m, 幅1.1m, 高0.8m以上) W10°Sに開口	天井石露出
4	第4号古墳	円墳	径5.0m 高1.2m	横穴式石室(全長2.5m, 羨門幅1.05m, 玄室中央幅1.3m, 奥幅1.05m, 高0.5m以上) W10°Sに開口	
5	第5号古墳	円墳	径9.4m 高1.2m	不明	中央に盜掘坑あるも未発掘か?
6	第6号古墳	円墳	径15.0m	横穴式石室(全長6.0m, 玄室幅1.2m, 高1.2m) 耳環1, 水晶製勾玉2, 鉄刀柄先金具, 須恵器片	1992年に東城町教育委員会が調査
7	第7号古墳	不明	不明	横穴式石室	封土流失, 天井石露出
8	第8号古墳	不明	不明	横穴式石室(全長約3m)	封土流失, 天井石露出
9	第9号古墳	円墳	径10.0m 高1.5m	土壙(長さ1.8m×幅0.7m) 須恵器片	1993年に東城町教育委員会が調査
10	第10号古墳	円墳	径8.0m 高1.0m	土壙2(縦1.9m×横1.0m, 縦1.0m×横0.7m) 勾玉1, 箕玉9, 小玉61, 算盤玉1, 鉄製摘釣1, 須恵器片	本文参照
11	第11号古墳	円墳	径12.0m 高1.5m	土壙(縦1.5m×横0.9m) 須恵器片	本文参照
12	第12号古墳	不明	不明	横穴式石室?	

第1表 川東大仙山古墳群一覧表

第1~5号古墳は、県教育委員会の遺跡台帳による
第6~12号古墳は、調査、及び現地踏査による

III 調査の概要

川東大仙山第10・11号古墳は、東城町市街地の南東に連なる丘陵の、南から北へ伸びる尾根線上に位置している。標高は499m～502m、水田との比高は約100mである。本調査と並行して東城町教育委員会が調査を行った第9号古墳から、北へ、第10号古墳、第11号古墳と3基が隣接して存在しており、第9号古墳と第10号古墳との間が約6m、第10号古墳と第11号古墳との間が約3mである。また第11号古墳の北側約30mには、1992年度に東城町教育委員会が調査を行った第6号古墳がある。

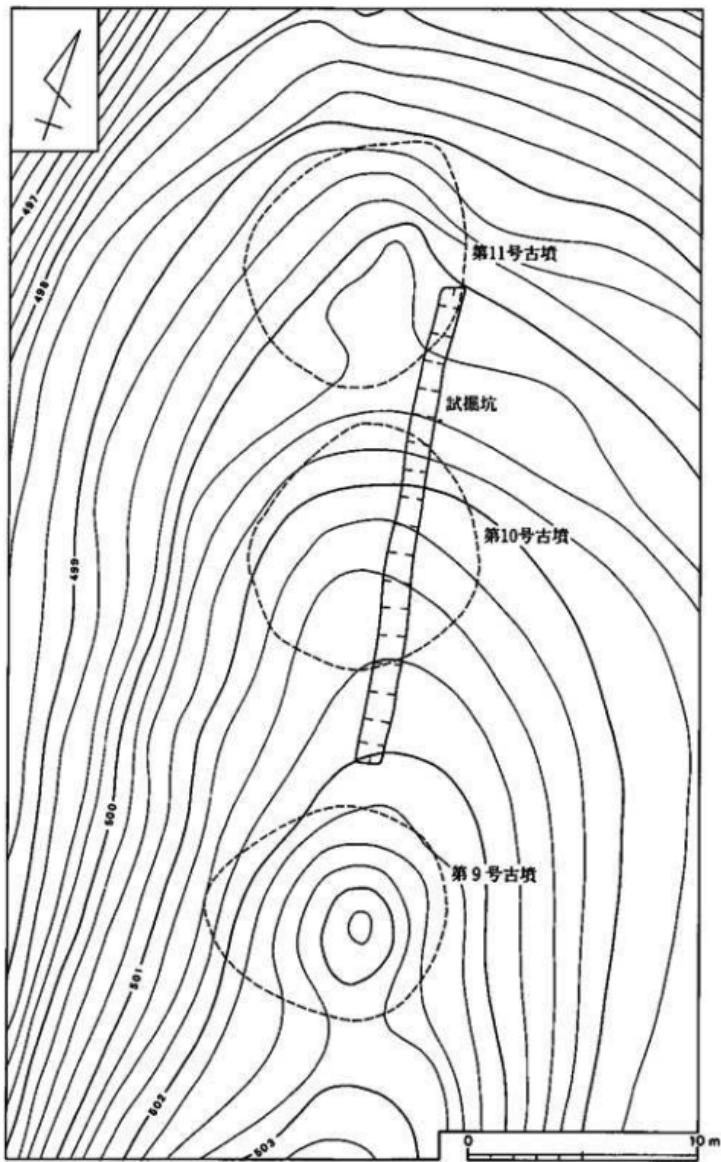
調査は、まず第10号古墳・第11号古墳を通した方向と、それと直交した方向に土層観察用の畦を設定して、埴裾、周溝を確認することから開始した。その結果、周溝は両古墳とも地山の黄褐色土まで掘り込んでめぐらされており、第10号古墳は直径約9m、第11号古墳は直径約12mの円墳であることが確認できた。また、第10号古墳の墳丘北西側斜面で4個の貼石状の割石を検出した。

第10号古墳のはば中央で、盛土から掘り込んだ2基の埋葬主体を検出した。いずれも東西方向に主軸をもつ土壙で、北側を第1主体、南側を第2主体とした。第1主体は、掘方の平面形が長方形で、長さ190cm、幅100cmである。72点の玉類が出土した。第2主体は、掘方の平面形が長方形で、長さ170cm、幅50cmである。検出面付近で鉄製の摘鏟1点が出土した他は、遺物は出土しなかった。

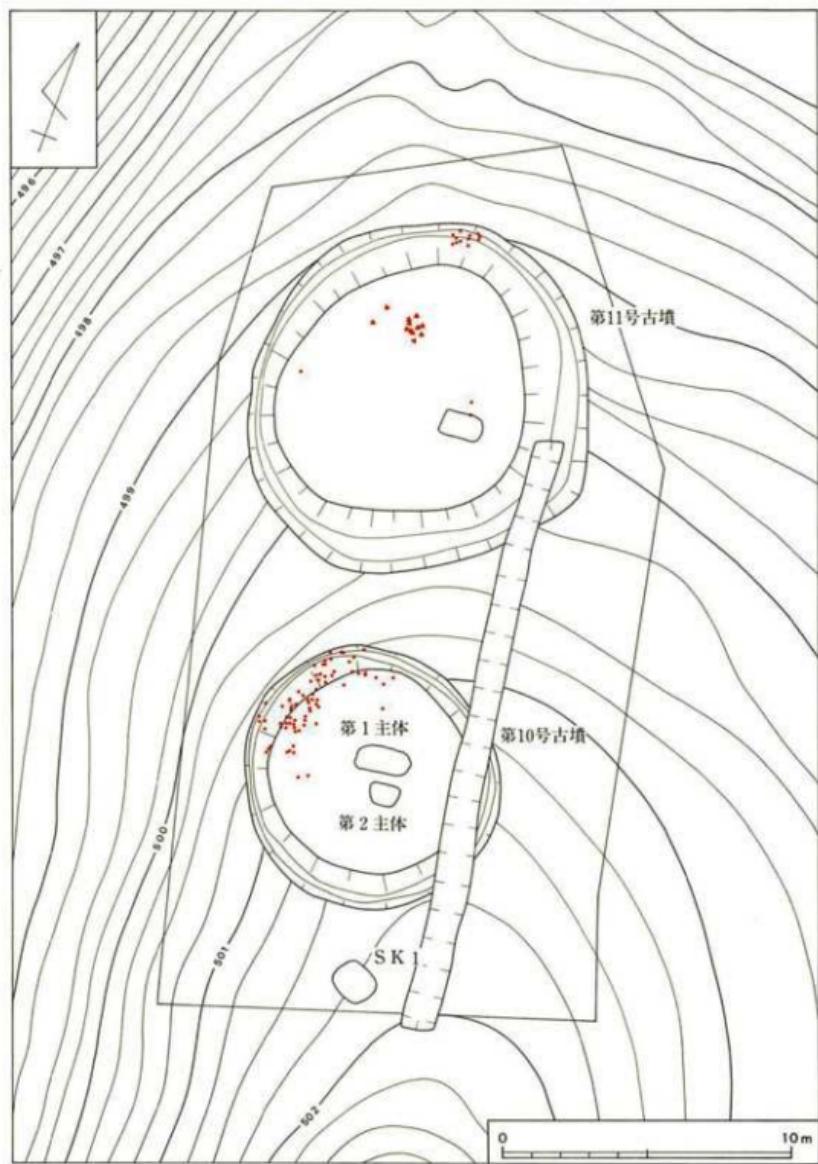
第11号古墳は墳丘の北西側を中心に大きく削平されていたが、墳丘南東部表土下には180cm×190cmの範囲で黄褐色粘土の堆積部分があり、この黄褐色粘土を掘り下げた結果、はば東西方向に主軸をもつ土壙を検出した。掘方の平面形は長方形で、長さ155cm、幅90cmである。内部から遺物は出土しなかったが、上部の黄褐色粘土から、セットと考えられる須恵器の杯蓋、杯身が各1点出土した。

以上のように、第10号古墳・第11号古墳は、埋葬主体に石材を使用しておらず、土壙墓と考えられる。

また、第9号古墳と第10号古墳の中間付近で黄褐色土を掘り込んだ小型の石棺(SK1)が確認された。長さ130cm、幅110cmの土壙に板石を組み合わせたもので、内部から玉類20点が出土した。



第3図 第9～11号古墳周辺地形図 (1:250)



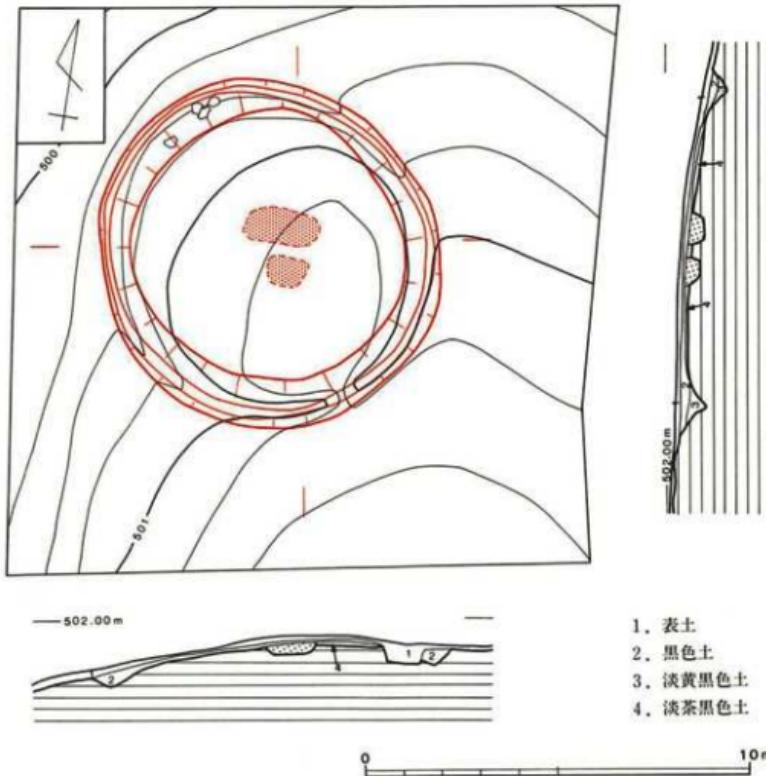
第4図 調査区設定図・遺構配置図 (1:200)
(●は、須恵器片出土位置 ▲は土師器片出土位置)

IV 調査の古墳

(1) 川東大仙山第10号古墳

調査前の状況

第10号古墳は、近接する第9～第11号古墳のうち、第9号古墳と第11号古墳に挟まれた位置に立地している。墳丘は、高さ、墳裾とも明確でなく、周溝と思われる落ち込みも明確ではなかったが、地形測量の状況からは、直径10m程度の円墳と考えられた。



第5図 第10号古墳遺構図・土層断面図 (1:150)

(アミ目は埋葬主体)

墳丘

本古墳は、南北8.0m、東西8.5m、現存する周溝最低部からの墳高1mの円墳である。墳丘盛土はその多くが失われており、墳丘上に淡茶黒色土が8~10cm残存していたのみであった。

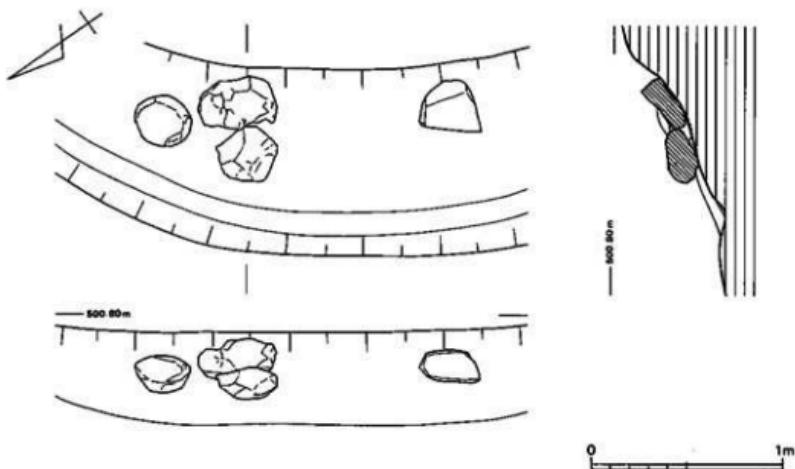
周溝は全局しており、幅は南側で1.3m、東側、西側で0.8m、北側で0.5mである。断面形はV形をなし、特に南側は傾斜が急である。深さは南側が最も深く、地山面との差は45~50cm、北側は35~40cmである。

墳丘北西部で、墳丘に貼り付いた状態で人頭大の割石を4個検出した。そのうち3個は近接していたが、1個は南側へ約0.7m離れていた。また、さらに南側約1.2mの周溝内から同様の石1個が出土したが、周溝底面から浮いており、斜面から転落したものと考えられる。墳丘に貼り付いた状態から、貼石と考えられる。

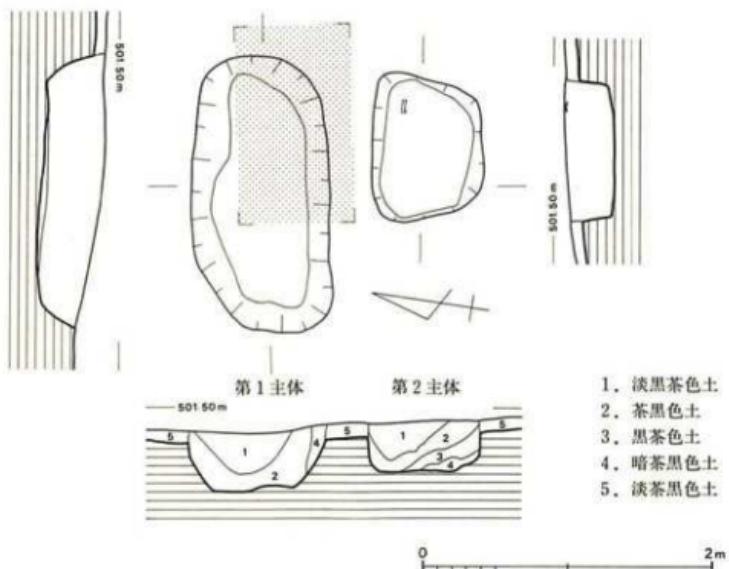
埋葬主体

主体部は土壙2基で、墳丘頂部付近で検出された。約0.3m離れて南北に並んでおり、北側を第1主体、南側を第2主体とした。

第1主体は、掘方の平面形が隅丸長方形で、長さ約190cm、幅約100cmである。深さは、東端で土壙検出面から40cmであるが、墳丘盛土の多くが流失していることから、本来はさら



第6図 第10号古墳墳裾貼石実測図(1:30)



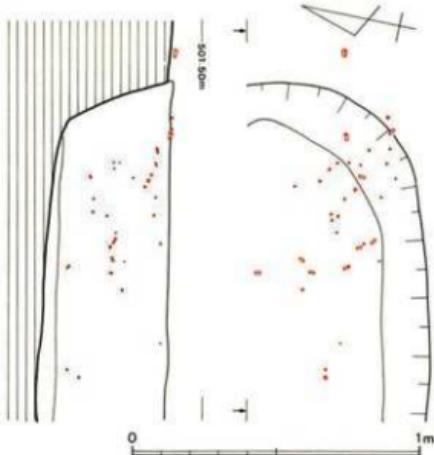
第7図 第10号古墳埋葬主体実測図 (1:40)

(アミ目は第8図の範囲)

に深かったと考えられる。底面の平面形は不整長方形で、長さ170cm、幅50cmである。東側から西側へわずかに傾斜している。内部に木棺の痕跡は確認できなかった。主軸は、N79°Eである。

遺物は、土壙の東南端付近を中心¹に玉類72点が出土したが、検出面から底面上約10cmまでにみられた。他に遺物は出土しなかった。遺物が東側に集中していること、底面が東側から西側へわずかに傾斜していることから、頭位は東側と考えられる。

第2主体は掘方の平面形が不整長



第8図 第10号古墳第1主体玉類出土状況 (1:20)

方形で、長さ約110cm、幅約80cm、深さは北端で土壤検出面から35cmであるが、第1主体同様、本来はさらに深かったと考えられる。底面の平面形は不整長方形で、長さ90cm、幅60cmで、ほぼ水平である。内部に木棺の痕跡は確認できなかった。主軸は、N81°Eである。

遺物は、土壤の北東隅で鉄製摘鎌1点が出土した。底面からの高さは30cmで、土壤検出面に近い高さである。他に遺物は出土しなかった。

第1主体と第2主体は、ともに墳丘盛土から掘り込んでいる。しかし、同一検出面で確認されたので、その新旧関係については確認できなかった。

出土遺物

第1主体から勾玉1点、管玉9点、算盤玉1点、小玉61点、第2主体から鉄製摘鎌1点が出土した。また、墳丘北西部の周溝上面で須恵器片が比較的まとまって出土した。

玉類（第9・10図、図版10）

勾玉（1）

碧玉製で、C状を呈する。表面はよく研磨されている。色調は暗緑色である。長さ34mm、厚さ（中央部）11mm、重さ9.61gである。穿孔は片側からで、孔径は、1～3mmである。

算盤玉（2）

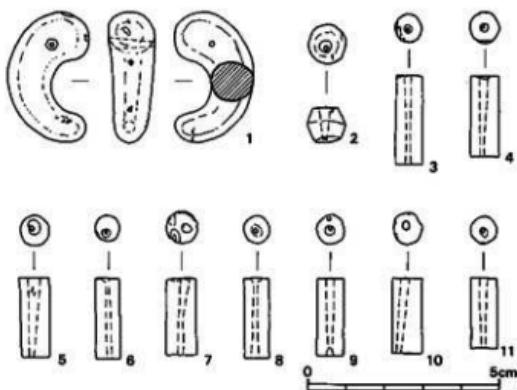
水晶製で、風化のため表面はざらざらしている。径10mm、厚さ9mm、重さ1.45gである。体部中央部が突出し、稜線をつくる。穿孔は片側からで、孔径は1～3mmである。

管玉（3～11）

すべて碧玉製で、よく研磨されている。色調は、暗緑色である。いずれも長さ20mm前後、直径7mm前後、重さ2g前後である。穿孔は、3と7が両側からであるが、他はすべて片側からである。孔径は、1～2mmのものが多い。

小玉（12～69）

すべてガラス製である。61点出土したが、図化し得たの



第9図 第10号古墳第1主体出土玉類実測図(1) (2:3)

は58点である。大きさにはばらつきがあり、最大のものは径9mm、厚さ5mmで、最小のものは径3mm、厚さ2mmである。形状は、胴部の張るものが多い。また、5個(13・21・30・42・63)には、側面に径、深さともに0.5~1mmの穴があった。色調は、青色が基調であり、深青色が37点と最も多い。他には、淡青緑色、淡青色、暗水色がある。また、黄色のものが1点(25)ある。

鉄器 (第11図、図版10)

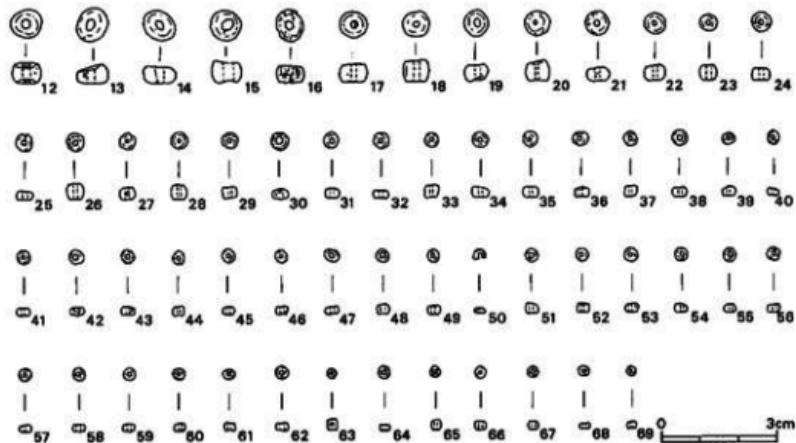
摘鐵

長さ8.8cm、幅3.2cmで、やや弓なりに反っており、刃部を長く使っている。幅3.2cm、厚さ0.3cmの断面三角形の板の両端を折り曲げて木柄の着装部を形成する。柄着装部内部に木質の痕跡は認められない。

須恵器 (第12図、図版10)

杯身 (1)

口縁部から体部上半の破片である。復元口径は14.0cmである。口縁部の立ち上がりは内傾気味に直線的に立ち上がり、端部でやや外反する。受部は外上方にまっすぐのびる。口縁端部は内傾して面をなし、凹線が1条めぐる。また、端部外面にも1条の凹線めぐる。



第10図 第10号古墳第1主体出土玉類実測図(2)(2:3)

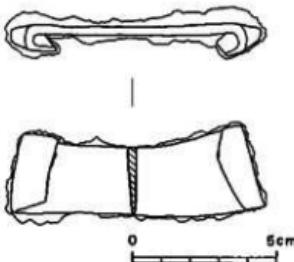
番号	種類	法量(mm, g)				材質	色調	備考(穿孔)	番号	種類	法量(mm, g)				材質	色調	備考(穿孔)
		径	厚さ	孔径	重さ						径	厚さ	孔径	重さ			
1	勾玉	11	34	3	9.61	碧玉	暗緑色	片側	36	小玉	4	3	1	0.05	ガラス	深青色	
2	算盤	11	9	3	1.45	水晶	透明	片側	37	小玉	4	3	1	0.07	ガラス	深青色	
3	管玉	8	23	2	2.48	碧玉	暗緑色	両側	38	小玉	4	3	1	0.05	ガラス	深青色	
4	管玉	8	21	2	2.66	碧玉	暗緑色	片側	39	小玉	4	3	1	0.05	ガラス	深青色	
5	管玉	9	21	4	2.59	碧玉	暗緑色	片側	40	小玉	4	2	1	0.04	ガラス	深青色	
6	管玉	7	21	2	1.88	碧玉	暗緑色	片側	41	小玉	4	2	1	0.05	ガラス	深青色	
7	管玉	9	21	3	2.81	碧玉	暗緑色	両側	42	小玉	4	2	1	0.04	ガラス	淡青緑色	穴あり
8	管玉	7	21	2	1.83	碧玉	暗緑色	片側	43	小玉	4	2	1	0.04	ガラス	深青色	
9	管玉	8	20	2	2.27	碧玉	暗緑色	片側	44	小玉	4	3	1	0.03	ガラス	淡青緑色	
10	管玉	8	20	2	2.59	碧玉	暗緑色	片側	45	小玉	4	2	1	0.05	ガラス	深青色	
11	管玉	7	18	2	1.81	碧玉	暗緑色	片側	46	小玉	4	2	1	0.05	ガラス	淡青緑色	
12	小玉	9	5	2	0.56	ガラス	深青色		47	小玉	4	2	1	0.03	ガラス	淡青緑色	
13	小玉	9	5	3	0.47	ガラス	深青色	穴あり	48	小玉	4	3	1	0.04	ガラス	深青色	
14	小玉	9	4	2	0.43	ガラス	深青色		49	小玉	4	2	1	0.04	ガラス	深青色	
15	小玉	9	5	3	0.56	ガラス	深青色		50	小玉	4	2	1	0.02	ガラス	深青色	
16	小玉	8	4	3	0.32	ガラス	深青色		51	小玉	4	3	1	0.04	ガラス	深青色	
17	小玉	8	5	2	0.39	ガラス	深青色		52	小玉	4	2	1	0.04	ガラス	深青色	
18	小玉	7	6	2	0.44	ガラス	深青色		53	小玉	4	2	1	0.04	ガラス	深青色	
19	小玉	7	4	2	0.26	ガラス	淡青緑色		54	小玉	4	2	1	0.04	ガラス	淡青緑色	
20	小玉	7	5	1	0.35	ガラス	深青色		55	小玉	4	2	1	0.03	ガラス	深青色	
21	小玉	7	4	1	0.22	ガラス	深青色	穴あり	56	小玉	4	2	1	0.03	ガラス	深青色	
22	小玉	6	4	1	0.20	ガラス	深青色		57	小玉	4	2	1	0.03	ガラス	深青色	
23	小玉	5	4	2	0.15	ガラス	深青色		58	小玉	3	2	1	0.03	ガラス	暗水色	
24	小玉	5	3	1	0.13	ガラス	深青色		59	小玉	3	2	1	0.03	ガラス	深青色	
25	小玉	5	2	2	0.11	ガラス	黄色		60	小玉	3	2	1	0.03	ガラス	淡青緑色	
26	小玉	5	4	1	0.13	ガラス	深青色		61	小玉	3	2	1	0.03	ガラス	深青色	
27	小玉	5	3	1	0.09	ガラス	深青色		62	小玉	3	2	1	0.03	ガラス	淡青緑色	
28	小玉	5	4	1	0.11	ガラス	暗水色		63	小玉	3	3	1	0.05	ガラス	淡青緑色	穴あり
29	小玉	5	3	1	0.08	ガラス	深青色		64	小玉	3	2	1	0.02	ガラス	淡青緑色	
30	小玉	5	3	2	0.06	ガラス	淡青緑色	穴あり	65	小玉	3	3	1	0.03	ガラス	淡青緑色	
31	小玉	5	3	1	0.08	ガラス	深青色		66	小玉	3	2	1	0.03	ガラス	淡青色	
32	小玉	5	2	2	0.06	ガラス	暗水色		67	小玉	3	2	1	0.01	ガラス	淡青緑色	
33	小玉	4	3	1	0.08	ガラス	深青色		68	小玉	3	2	1	0.02	ガラス	深青色	
34	小玉	4	3	1	0.08	ガラス	深青色		69	小玉	3	2	1	0.01	ガラス	深青色	
35	小玉	4	3	1	0.07	ガラス	深青色										

第2表 第10号古墳第1主体出土玉類計測表

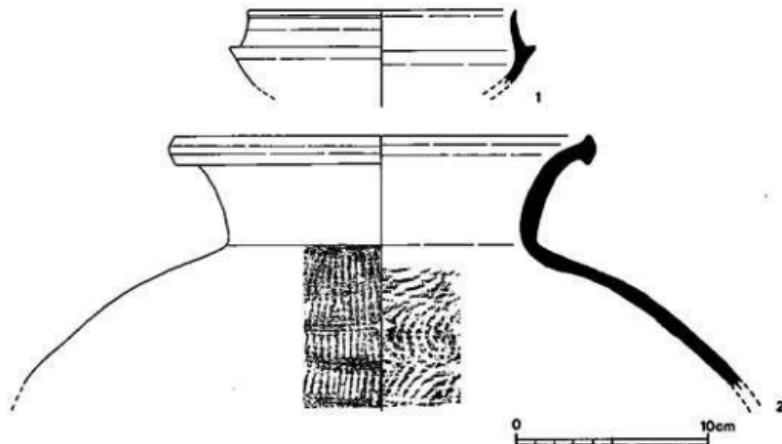
立ち上がりの高さは1.9cmである。受部基部の溝はあまり明瞭ではない。全体の調整は、右回りの回転ナデである。焼成は良好で、胎土には2mm以下の砂粒を少量含む。色調は、内外面とも青灰色である。また、体部と受部の外面には緑灰色の自然釉が付着している。

甕(2)

口縁部から体部の破片で、復元口径は21.5cmである。頭部から口縁部にかけて緩やかに外反し、口縁端部は上下に肥厚する。調整は、回転ナデの後、体部の外面は格子状、内面は同心円状のタキ目を施す。回転方向は不明である。焼成は良好で、胎土には2mm以下の砂粒が少量含まれる。色調は、内外面とも灰褐色を呈する。



第11図 第10号古墳第2主体出土鐵器実測図(1:2)

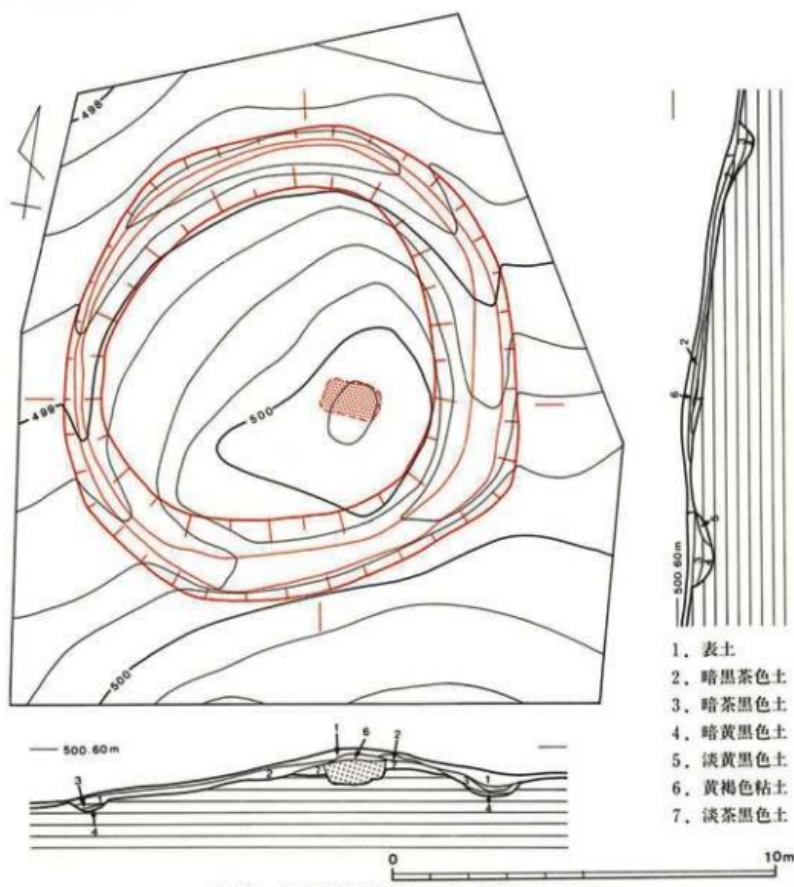


第12図 第10号古墳出土須恵器実測図(1:3)

(2) 川東大仙山第11号古墳

調査前の状況

第11号古墳は、近接して立地する第9～第11号古墳のうち、最も北側に位置している。墳丘は、第10号古墳に比べよく残存しており、墳裾も明確に推測でき、直径約10mの円墳と考えられた。



第13図 第11号古墳遺構図・土層断面図 (1:150)

(アミ目は埋葬主体)

墳丘

本古墳は、南北11.5m、東西11.0m、周溝最低部からの墳高1.8mの円墳である。

墳丘盛土の多くは流失し、特に、北西部では顕著であるが、埋葬主体が検出された南東部で淡茶黒色、黄褐色の盛土が約50cm残っていた。

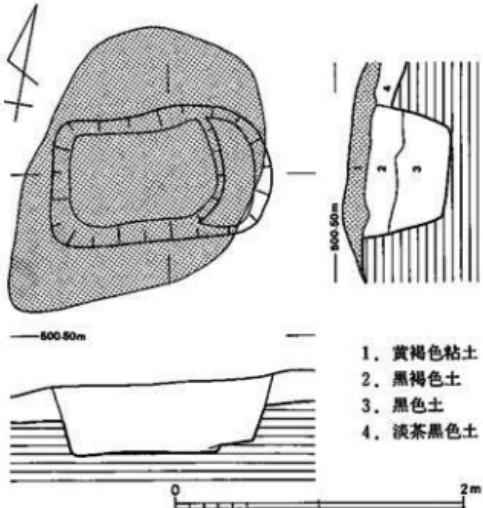
周溝は全周している。幅は南側2.0m、東側2.2m、北側1.5m、西側1.0mと、南側から東側が広く、西から北側にかけては狭くなっている。断面は、幅の広い東から南側では逆台形をなし、底面の幅は0.7m、また幅の狭い西から北側はU形をなす。底面の幅は0.3~0.4m、地山面からの深さは、東から南側で約50cm、西から北側は20~30cmである。

埋葬主体

主体部は土壙で、墳丘の中心からやや東に寄った墳頂部で検出され、墳丘盛土から掘り込んでいた。

土壙の直上には、180cm×190cmの不整形の黄褐色粘土部分があり、土壙上面から約12cmの厚さで覆っていた。この中から須恵器の杯蓋、杯身が出土した。杯蓋にはわずかに赤色顔料が付着しており、供獻したものであろう。

土壙の掘方の平面形は長方形で、長さ155cm、幅90cm、東側の深い部分で土壙検出面からの深さは55cmである。底面は、長さ130cm、幅70cmであり、東から西へかけてやや傾斜している。東側は、端から35cmの部分が6cm高くなっていた。主軸はN86°Eである。内部には、木棺の痕跡は確認できなかつた。また、遺物は出土しなかつた。第10号古墳の埋葬主体とほぼ主軸方向が同じであること、底面が東側から西側に向かってわずかに傾斜していることなどから、頭位は東側と考えられる。



第14図 第11号古墳埋葬主体実測図 (1:40)

(アミ目は黄褐色粘土範囲)

出土遺物

遺物は、主体部上の黄褐色粘土中から出土した須恵器の杯蓋、杯身各1点のほか、北側の周溝上面から須恵器の壺1点が出土した。また、図化し得なかったが、墳丘盛土が流失している北西部の表土から土師器片が数点出土した。

須恵器（第15図、図版11）

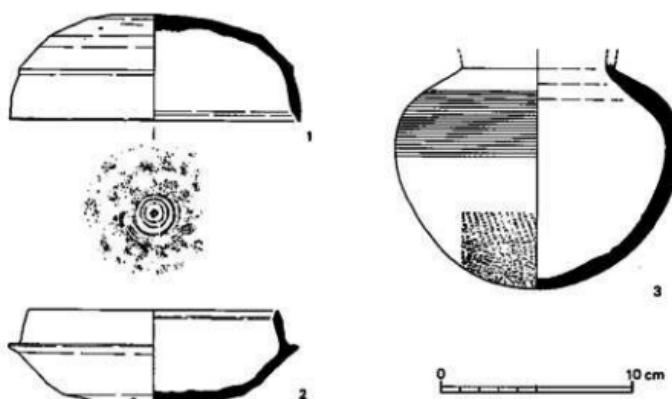
杯蓋（1）

口縁部が一部欠けるものの、ほぼ完形である。口径15.0cm、器高5.5cmである。天井部は丸く、天井部と口縁部の境には稜線が巡る。この稜線は、口縁部に沈線をめぐらすことによって形成している。口縁端部は内傾して面をなし、凹線を1条めぐらす。また、天井部内面中央には、同心円文がある。

調整は回転ナデで、天井部外面は4分の3に右回りの回転ヘラケズリを施している。焼成は良好で、胎土には1~2mmの砂粒が多量に含まれている。色調は内外面とも淡灰褐色で、外面の稜線付近に一部赤色顔料が残っている。

杯身（2）

口縁部が約3分の1欠けている。復元口径13.0cm、器高4.9cmである。底部からやや内湾しながら立ち上がり、受部は外やや上方に広がる。立ち上がり部分はやや内傾して立ち上がり、口縁端部は内傾する面をもち凹線を1条めぐらす。立ち上がりの高さは1.8cmである。



第15図 第11号古墳出土須恵器実測図（1:3）

1とセットになると考えられる。

調整は回転ナデで、底部から受部へかけての約2分の1には右回りの回転ヘラケズリを施している。また、底部内面中央には、一方向のナデを施している。焼成は良好で、胎土には1mmから2mmの砂粒が多量に含まれている。色調は内外面とも灰褐色である。

壺(3)

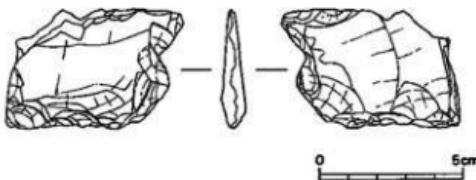
口頸部が失われているため、器形は明らかでない。胴部最大径は15.0cm、残存高は11.8cmである。底部は丸底である。

肩部付近にはカキ目を施す。胴部下半から底部にタタキ目を残す。焼成は良好で、胎土には0.5~2mmの砂粒をまばらに含む。色調は、内面は灰褐色、外面は青灰色である。

石器(第16図、図版11)

石庵丁

第11号古墳墳丘盛土中から出土したもので、現存長6.2cm、現存幅4.1cm、厚さ0.9cmである。石材は安山岩である。打製石庵丁と考えられ、両端に挟りをもつものようであるが、一方が欠失しており、不明である。刃部の調整は、両面から行われている。



第16図 第11号古墳墳丘盛土出土石器実測図(1:2)

(3) その他の遺構

SK 1

第9号と第10号古墳のほぼ中間にあたる、第10号古墳の南方1.7mに存在する箱式石棺である。黒色土の下の黄褐色土面で検出した。掘方の平面形は隅丸長方形で、長さ130cm、幅110cm、深さは東側で黄褐色土面から45cmである。掘方の断面形は逆台形で、大きく角度をつけて掘り込んでいる。長軸は等高線にほぼ直交し、主軸はN58°Eである。

棺を構成する石は、両小口とも1枚、左右の側石がそれぞれ2枚の計6枚である。いずれも広口面を内側に向け、横長に使用されており、小口石を挟みこむ形で組まれている。小口石は、東側は37cm×27cm大の割石を用いているが、西側は25cm×16cm大のやや小型の板石を用いている。土壇底面の縁辺は、小口石、側石を固定するために深さ3~8cmの掘り込みがある。床面には、地山を掘り込んだ黄褐色土を、主に南西側に敷き詰めて水平を整えている。内法は、長さ72cm、小口幅は、東側で38cm、西側で29cmである。蓋石は、40cm×50cm大の2枚の板石と20cm×45cm大の1個の横長の石を使用している。板石の間の隙間には20cm大の角礫を補っていた。3個の蓋石を横架した後、さらに20cm×35cm大、30cm×50cm大の割石2個を置いていた。なお、蓋石や側石との間や掘方の一部には黄褐色粘土が部分的に詰められていた。

棺幅の相違、小口石の大きさの違い、蓋石の様相、玉類の出土状況などからみて、頭位は東側と考えられる。

棺内北東部の床面付近で玉類20点が出土した。他に遺物は出土しなかった。

出土遺物（第18図、図版11）

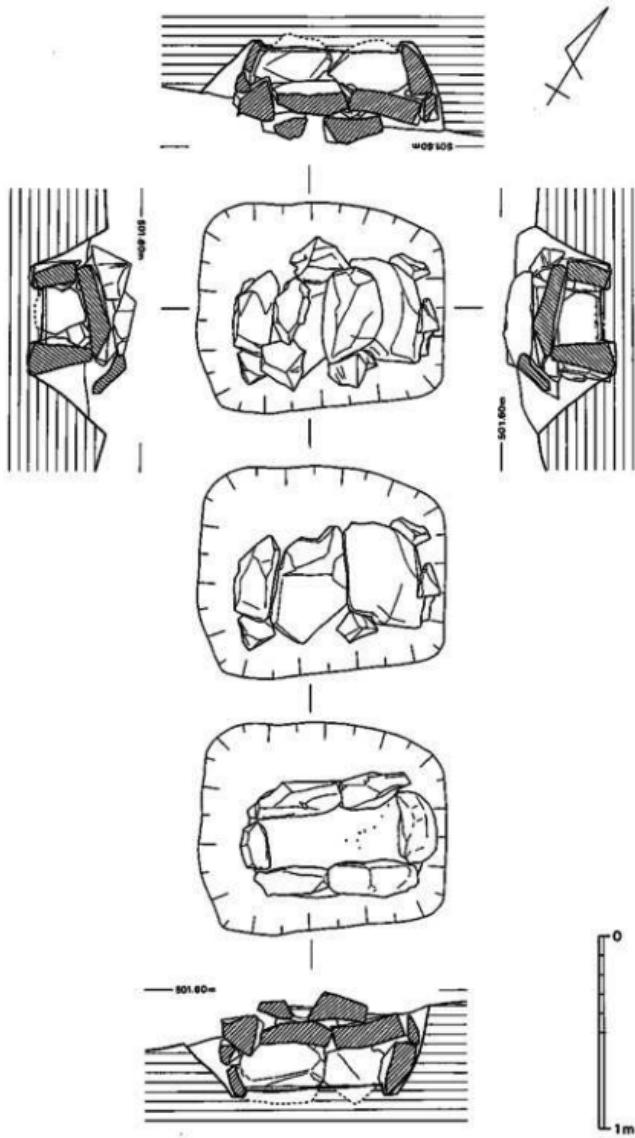
棺内床面付近で玉類20点が出土した。内訳は、ガラス製小玉14点、土製小玉5点、碧玉製小玉1点である。

ガラス製小玉（1~14）

大きさのはらつきは少なく、径3~4mm、厚さ2~3mmである。色調は、深青色が多い。

土製小玉（15~19）

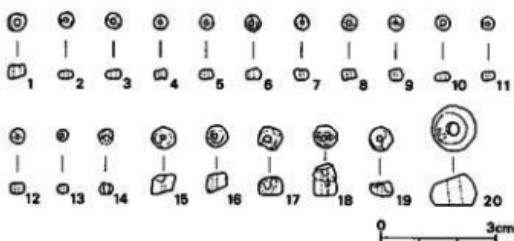
ガラス製小玉に比べてやや大型で、径6~8mm、厚さ3~5mmである。また、18は2連珠形を呈し、厚さは8mmである。いずれも胴部は張らない。表面は炭素が付着し、おおむね黒色を呈する。



第17図 SK 1実測図 (1:30)

碧玉製小玉 (20)

大型のもので、径12mm、厚さ8mm、孔径3mmである。色調は、暗緑色である。



第16図 SK 1 出土玉類実測図 (2:3)

番号	法量 (mm, g)				材質	色調	備考	番号	法量 (mm, g)				材質	色調	備考
	径	厚さ	孔径	重さ					径	厚さ	孔径	重さ			
1	5	4	2	0.12	ガラス	暗水色		11	4	2	1	0.04	ガラス	深青色	
2	4	3	2	0.04	ガラス	淡青色		12	4	2	1	0.07	ガラス	深青色	
3	4	2	2	0.05	ガラス	深青色		13	3	3	1	0.04	ガラス	深青色	
4	4	3	1	0.05	ガラス	深青色		14	—	3	—	0.04	ガラス	淡青緑色	
5	4	3	1	0.06	ガラス	深青色		15	8	5	2	0.20	土	淡黒色	
6	4	3	1	0.05	ガラス	深青色		16	7	5	1	0.18	土	暗黒色	
7	4	3	1	0.06	ガラス	深青色		17	6	5	2	0.15	土	淡黒色	
8	4	3	1	0.06	ガラス	深青色		18	6	8	2	0.26	土	暗黒色	2連珠
9	4	3	1	0.06	ガラス	深青色		19	6	4	1	0.11	土	淡緑色	
10	4	2	2	0.04	ガラス	深青色		20	12	8	4	1.53	碧玉	暗緑色	

第4表 SK 1 出土玉類計測表

V まとめ

川東大仙山第10・11号古墳発掘調査における調査成果は以上述べたとおりである。ここでは、調査成果を確認、整理し、付近の遺跡を参考にしながら、まとめとしたい。

第10号古墳は、直径約8mの円墳であるが、墳丘盛土の多くは流失していた。墳丘北西側斜面で検出された、貼石と考えられる4個の割石は、いくつか失われている可能性もあるが、墳丘の他の部分から検出されないことからみて、全体にめぐらされたものではなく、一部の斜面に貼り付けられたものと考えられる。貼石が検出された場所は、本古墳でも一番墳丘が低くなる地点であり、土留めの意味があるとも考えられる。検出された2基の埋葬主体はいずれも土壙で、内部に木棺の痕跡は確認できなかった。

第11号古墳は、直径約11mの円墳であるが、北西側の墳丘盛土が大きく流失していた。盜掘、あるいは自然流失が考えられるが、盜掘と考えると、この流失部に他の埋葬主体が存在した可能性もある。しかし、その痕跡を確認することはできなかった。埋葬主体は土壙で、内部に木棺の痕跡は確認できず、また、土壙内の土層断面からもその痕跡は認められなかった。

以上のように、両古墳は、土壙を埋葬主体とした小円墳である。両古墳の築造時期を推定できる資料としては、出土した須恵器がある。第11号古墳墳頂部の主体部直上から出土した須恵器の杯蓋・杯身は、比較的大型で、立ち上がりもまだしっかりしているが、口縁端部の段はかなり退化しており、陶邑編年のMT15に比定することができよう。⁽¹⁾これは6世紀前半に相当する。また、第10号古墳墳丘で出土した須恵器の杯身もほぼ同時期のものと考えられる。

一方、両古墳の埋葬主体の主軸がほぼ同じ方向を示すこと、周溝が互いに切り合っていないことなども、両古墳がほぼ同時期の6世紀前半に築造されたことを傍証するものであろう。

第10号古墳と第9号古墳のほぼ中間に位置するSK1（箱式石棺）については、両古墳との関係を明らかにすることはできなかった。ただ、石棺は小型であり、幼小児墓の可能性があることから、第9号あるいは第10号古墳に関係する墓としてとらえることができよう。築造時期については、出土した玉類のうち、土製小玉からある程度の時期を推測することができる。県内での土製小玉の出土例はあまり多くないが、現在までに、三次市大坂第6号古墳⁽²⁾（6世紀前半、竪穴系石室、土壙）、双三郡三良坂町植松第1号古墳⁽³⁾（6世紀前

半、粘土層、土壤）、甲奴郡甲奴町塚ヶ迫第1号古墳（6世紀後半、横穴式石室）、比婆郡東城町未渡大仙山第5号古墳⁽⁴⁾（6世紀後半、横穴式石室）、深安郡神辺町迫山第1号古墳⁽⁵⁾（6世紀後半、横穴式石室）などで出土している。

これらのうち、大坂第6号古墳の第1主体である豎穴系石室からは28点の土製小玉が出土している。径は8~10mmと本古墳群のSK1出土のものよりやや大きい。出土した埴輪から6世紀前葉の築造と考えられている。また、植松第1号古墳では、B主体である土壤から土製小玉84点が出土した。径は1cm前後で、SK1から出土したものと比べるとやや大きい。築造時期は、出土須恵器から、6世紀前半と考えられている。

一方、東城町内の未渡大仙山第5号古墳からは、土製小玉が横穴式石室の封鎖石付近から14点出土している。径は5.5~8mmとSK1出土のものと近似している。築造時期は、出土須恵器からみると、6世紀後半のやや古い時期で、7世紀初頭にかけて使用されたものと考えられている。このような出土例からみると、土製小玉は、県内では6世紀全般にわたって副葬されていたようである。

SK1の築造時期は、土製小玉の副葬に加えて、蓋石の隙間や掘方との間に第11号古墳の主体部直上でみられた黄褐色粘土と同様の土が詰められていたことなどからみて、第10・11号古墳が築造されたのとほぼ同時期、あるいはやや遅れて造られたものと考えられる。

川東大仙山古墳群は、12基の古墳からなる。そのうち今回調査を行ったのは第10・11号古墳であるが、ほかに、東城町教育委員会が調査を行った第6・9号古墳、また開発区域外にある第7・8号古墳の計6基が比較的隣接している（第2図参照）。

第9号古墳は、第10・11号古墳と同様、土壤を埋葬主体とする小円墳で、埋葬主体の主軸方向がほぼ同じであること、第10・11号古墳と隣接してほぼ直線的に並ぶことなどから、第10・11号古墳とほぼ同時期の築造と考えてよく、また、立地状況などからみて、三古墳は互いに何らかの関係のある人物が葬られた可能性もある。

第6号古墳は横穴式石室を埋葬主体とする円墳で、出土須恵器などから、6世紀中頃から後半にかけての築造である。第7・8号古墳は、未調査のため詳しい内容は不明であるが、横穴式石室を埋葬主体とし、立地、規模などから、6世紀末から7世紀初頭にかけての築造ではなかろうか。

このようにみると、本古墳群のうち上記の6基は、6世紀前半から7世紀初頭にかけて継続的に営まれていたようで、土壤を埋葬主体とした時期から横穴式石室が普及する時期への変遷過程をよく示しているといえよう。

註

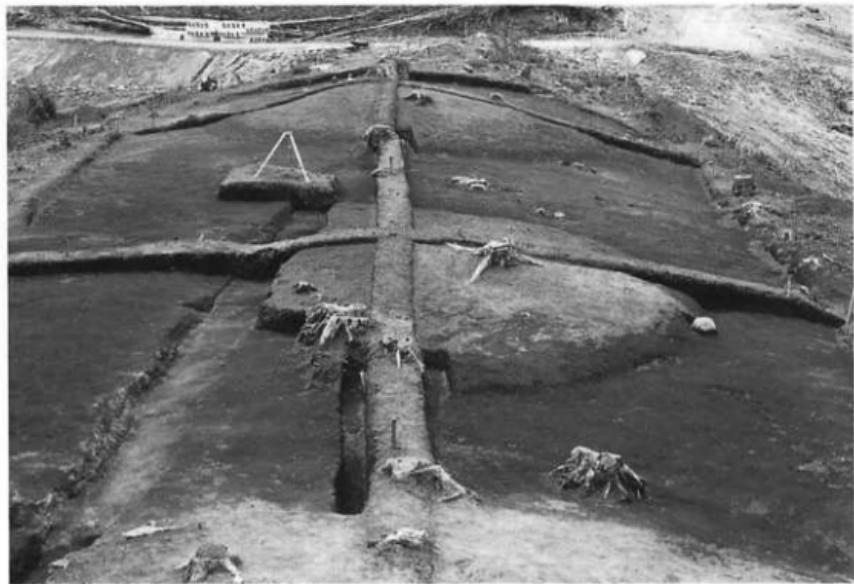
- (1) 平安学園考古学クラブ 「陶邑古窯址群Ⅰ」 1966年
- (2) 大坂遺跡発掘調査団 「大坂遺跡」 1985年
- (3) 河瀬正利・向田裕始 「双三郡三良坂町植松第1号古墳発掘調査報告」「芸備」第3集 1975年
- (4) 甲辰町教育委員会 「冢ヶ迫第1号古墳発掘調査報告書」 1983年
- (5) 桜垣栄次 「未渡大仙山第5号古墳」「中国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(2)」
(広島県教育委員会) 1979年
- (6) 神辺町教育委員会 「迫山第1号古墳発掘調査概報」「神辺町埋蔵文化財調査報告Ⅲ」 1983年



a. 川東大仙山第10・11号古墳遠景（北西から）



b. 川東大仙山第10・11号古墳調査前全景（北西から）



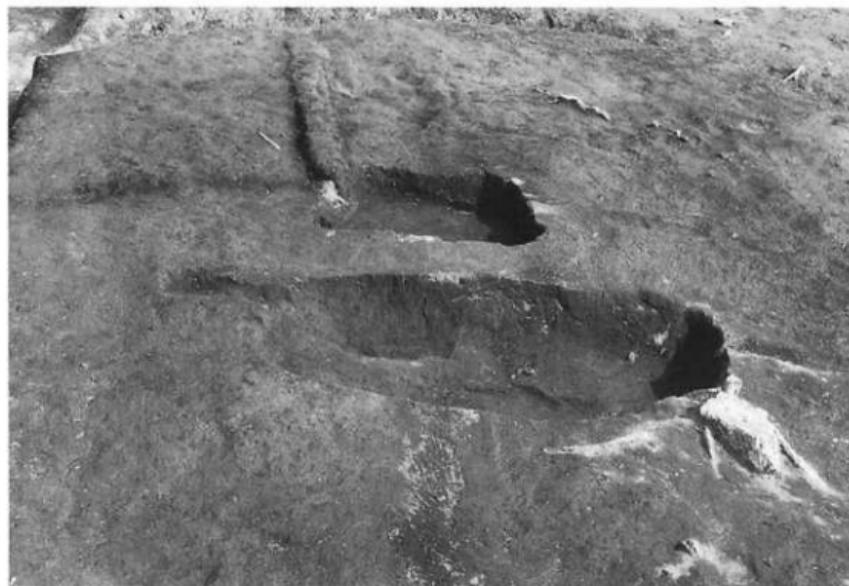
a. 第10号古墳埴丘全景（北から）



b. 同上遺構検出状況（北から）



a. 第10号古墳第1主体遺物出土状況（北東から）



b. 同上。第1主体（手前）および第2主体完掘状況（北から）



a. 第10号古墳第1主体（左）および第2主体完掘状況（西から）



b. 同上、墳裾北西部の貼石検出状況（北西から）



a. 第11号古墳墳丘全景（北から）



b. 同上遺構検出状況（北から）



a. 第11号古墳主体部上部の須恵器出土状況（東から）



b. 同上主体部直上黄褐色粘土（北から）



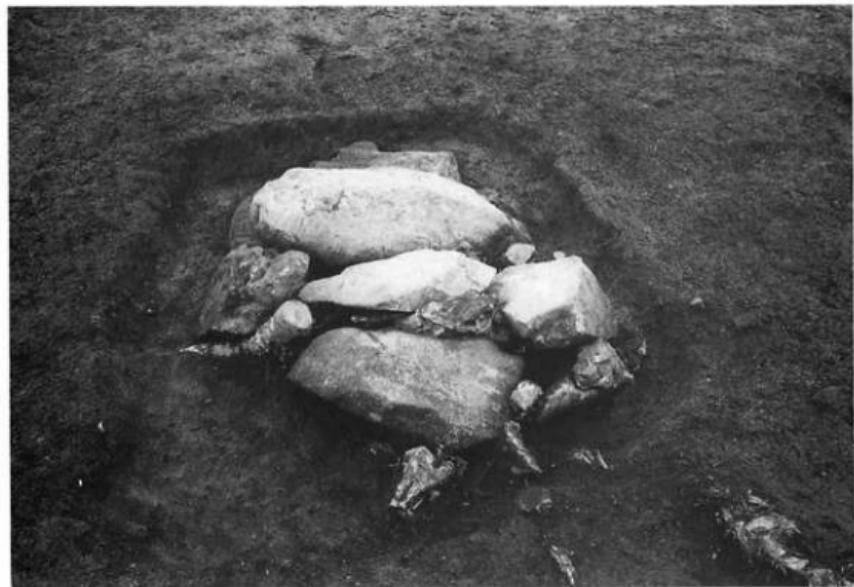
a. 第11号古墳主体部完掘状況（北西から）



b. 同上（西から）



a. SK 1 検出状況（南西から）



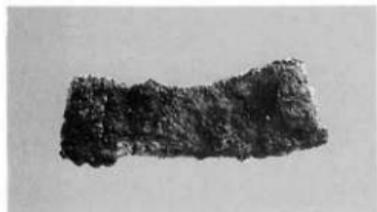
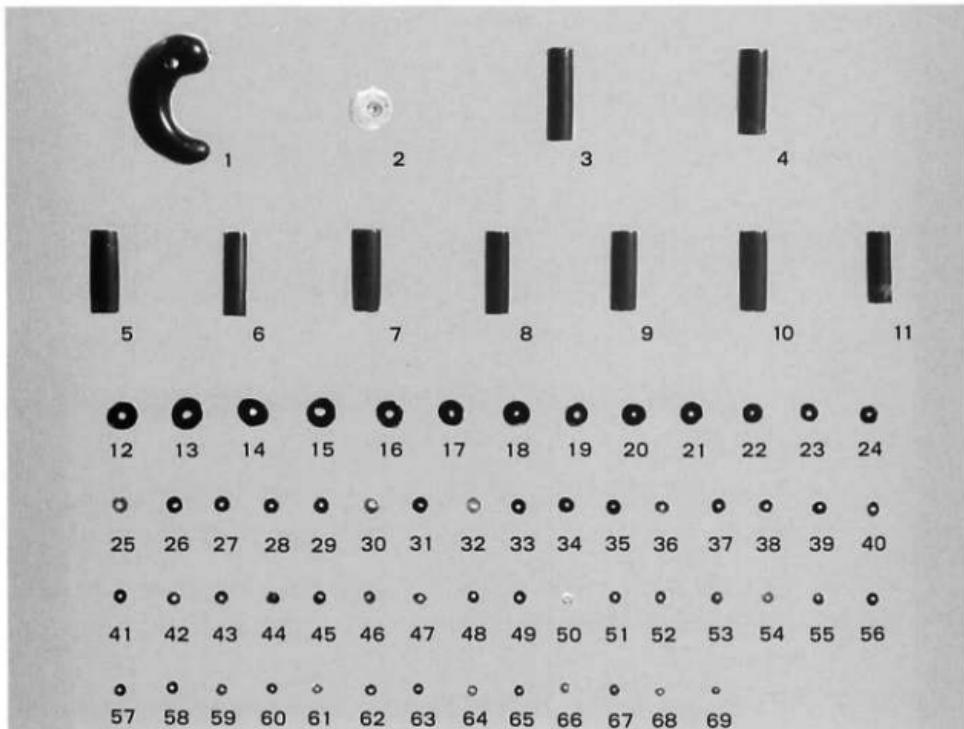
b. 同上 (北西から)



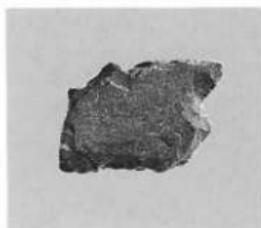
a. SK 1 側石検出状況（南西から）



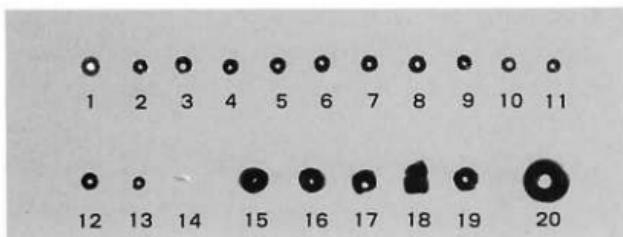
b. 同上（北西から）



第10号古墳出土玉類、鉄器、須恵器



a. 第11号古墳出土須恵器および埴丘出土石器



b. SK 1 出土玉類

文献データシート

書名	川東大仙山第10・11号古墳 (広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書第125集)		
編集者	平川孝志		
執筆者	平川孝志・木村健二		
発行所	財団法人広島県埋蔵文化財調査センター	発行年月日	1994年3月
遺跡名	①川東大仙山第10号古墳 ②川東大仙山第11号古墳		
読みみ	①、② かわひがしだいせんやま		
所在地	広島県 比婆郡 東城町 川東		
種別	古墳・墓		
時代	古墳		

広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書第125集

川東大仙山第10・11号古墳

発行日 平成6(1994)年3月

編集・発行 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター
〒733 広島市西区観音新町4丁目8番49号
TEL (082)295-5751

印刷所 株式会社 中本本店
〒730 広島市中区東白島町13-15
TEL 代表(082)221-9181